
【特集】 高度経済成長のなかの薬害問題——サリドマイド事件関係資料を読み解く

特集にあたって

山本 唯人

法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズ（以下、「環境アーカイブズ」）では、2021年3月16日、環境・市民活動アーカイブズ資料整理研究会（以下、「資料整理研究会」）「サリドマイド事件関係資料を公開する——薬害の記録，継承の意義をめぐって」を開催し、同年5月10日、「川俣修壽・サリドマイド事件関係資料（第3次寄贈分）」を公開した。これにより、川俣修壽氏より環境アーカイブズに寄贈されたサリドマイド事件関係資料はすべて公開された（2022年6月時点）。

本特集は、この公開をきっかけに、環境アーカイブズで資料整理を担当した長谷川達朗氏と資料寄贈者・川俣氏の資料整理研究会での報告を発展させるとともに、環境アーカイブズ担当教員の山本唯人、戦後日本の薬害を研究領域の一つとする松枝亜希子氏の論文を加えて構成される。

本特集の視点は、「高度経済成長期のなかの薬害問題」である。

戦後の日本は、工業の発展を背景に、飛躍的な経済成長を遂げるとともに、深刻な環境問題を全国各地で引き起こした。環境アーカイブズが主な収集対象とするのは、こうした高度成長期以降に起きた環境問題に関する資料群である。

高度経済成長期は大衆消費社会の成立を背景に、人びとが薬局を通じて医薬品を購入する「大衆薬」の仕組みが都市部を中心にはじめて広く浸透した時代でもあった。ところが、医薬品の普及にもかかわらず、製薬産業の規制は不十分であり、1950年代から70年代にかけての日本では、深刻な薬害がいくつも発生した。

環境アーカイブズでは、2009年8月の設立当初から、主に工場等の立地点で起こされる公害問題に加えて、同時代の工業生産に立脚しながらも消費行為を通じて被害が拡散・増幅される薬害問題に注目し、その資料群を収集してきた。

その背景には、医療・保健という限られた研究分野の一課題であることを越えて、この時期の薬害が、「生産活動や消費活動という人為的原因」によって、「個人の生存・生活や社会の存続に対する打撃や困難」（舩橋晴俊）がもたらされるという、「高度経済成長期の社会」が抱える構造的な社会問題の一つであるという認識があった。

いま、薬害を見ることで、高度経済成長期とは、いわゆる公害問題にとどまらず、人びとが日常生活を営む消費の場を含めて、広範かつ多層的に、生存・生活する環境の根底を危機に陥れた時代であったことが浮かび上がってくる。

環境アーカイブズによる薬害資料の収集が意図したのは、専門分化した認識の枠組みを一旦括弧にくくり、高度経済成長が人びとにもたらした「打撃や困難」の実相を、同時代の文脈に即して広

く検証しなおすことであり、その前提である「環境問題」という認識枠組みの境界を、残された資料の側から問い、鍛えなおすことでもある。

本特集では、このような視点から、環境アーカイブズ所蔵の代表的資料群の一つである「川俣修壽・サリドマイド事件関係資料」を紹介し、このアーカイブズの活用から生まれる学知のイメージの一端を提示しようと試みた。

本特集は4本の論文から構成される。

第一論文は、環境アーカイブズの担当教員・山本唯人（法政大学大原社会問題研究所特任准教授）による「環境アーカイブズのなかの薬害問題——「サリドマイド事件関係資料」を通して」である。

山本論文では、環境アーカイブズの設立を主導した社会学者・船橋晴俊の著作と、法政大学サステイナビリティ研究教育機構の関連文書をもとに、初期の資料収集方針がどのように作成され、そのなかで薬害資料がどのように位置づいていたかを検討した。合わせて、資料寄贈者・川俣修壽氏への聞き取り・その提供資料をもとに、資料群の環境アーカイブズへの寄贈過程を検証し、資料を収集した側と寄贈した側の文脈の交わるところに、「サリドマイド事件関係資料」の位置づけを浮かび上がらせようとした。

第二論文は、環境アーカイブズRA（リサーチアシスタント）として、「サリドマイド事件関係資料」の整理を担当した長谷川達朗氏による「高度成長期の薬害と家族・消費——日本のサリドマイド事件の場合」である。

長谷川論文では、資料整理担当者として資料群の概要と編成に関する基本的情報を提示してもらうとともに、近現代史を専門とする歴史学者の立場から、注目するテーマの一端を、具体的な資料の読み解きを通して掘り下げてもらった。そこでは、資本主義経済の矛盾に根差した消費者災害という薬害の位置づけ、「和解」による解決方式の選択とその背景にある家族規範との関係の指摘など、高度経済成長期という文脈のなかで薬害を論じなおすための視点が、提示されている。

長谷川氏が活用した、サリドマイド裁判の原告団事務局員・名倉妙子氏の業務日誌（名倉ノート）は、本資料群を特徴づける資料の一つである。事務局の日々を、一個人の目で黙々と綴った業務日誌は、「和解」によって解決したとされるこの事件の裁判記録を、別の視点から見つめ返すもう一つの記録である。長谷川論文では、原所蔵者の川俣氏以外では、この資料をはじめて学術の立場から位置づけ、歴史叙述に活用した。

第三論文は、高度経済成長期における医薬品や薬害を研究領域の一つとする社会学者・松枝亜希子氏（立命館大学生存学研究所客員協力研究員）による「サリドマイド訴訟への市民運動による支援と原告団との見解の相違について」である。

松枝論文では、薬害が頻発した1950年代から70年代にかけての状況を、厚生省の薬事関連制度を含めて広く解説し、そのなかにサリドマイド事件の問題を位置づけていただいた。その上で、薬害ディスコース分析の方法を参考に、サリドマイド裁判の支援者、ジャーナリスト、科学者などの言説を分析し、その位置関係がどのように「和解」による解決の選択へとつながったかを検討した。

第四論文は、本資料群の寄贈者・川俣修壽氏による「サリドマイド事件の歴史的資料」である。

川俣氏は「サリドマイド裁判を支援する市民の会」メンバーとして、裁判当時から被害者支援に関わったジャーナリストであり、「和解」による裁判の終結が「正義の解決」だったのかを自分なりに評価したいとの動機から、膨大な資料群の収集を開始した。

川俣論文は、本資料群の直接の作成者（収集者）の立場から、その動機と経緯を執筆したものであり、本資料群の文脈を把握する上で、最も基本となる文献である。本特集に当たり、このような論文を寄せていただいたことに厚く感謝を申し上げたい。「サリドマイド事件関係資料」と一体的な関係にある文献として、長く読み継がれることを期待する。

（やまもと・ただひと 法政大学大原社会問題研究所准教授）